

富山県立大学構内の樹種目録と分布調査 および樹種相の歴史性について

鈴木 浩司
(工学部教養教育)

要約：富山県立大学の構内に生育するすべての樹木の種を同定し、また、地図上にその位置をプロットした。裸子植物 4 科 10 属 11 種 13 分類群および被子植物 36 科 60 属 78 種 87 分類群、合わせて 40 科 70 属 89 種 100 分類群を確認した。概して、県立短大時代からある北側の区画や太閤池の周辺は樹種の多様性が高く、メタセコイヤやヒマラヤスギの大木のほか、高木樹（アカマツ、スギ、サワラ、コブシ、ウラジログシ、ナラガシワ、ケヤキ、クヌギ、エノキ、ヤマハゼ、ヌルデ、ネムノキほか）、低木樹（ノイバラ、ムラサキシキブ、アオキ、ナワシログミ、ヒサカキ、ヒイラギ、ウメモドキ、タラノキ、カクレミノ、ヤツデほか）、つる性木本（ツルウメモドキ、アケビ、アオツヅラフジほか）などの様々な樹種が混在し、林のような様相を示している。一方、南側の芝生や駐車場が広がる区画では、クロマツやシラカシ、ソメイヨシノ、モチノキ、イロハモミジなど公園樹や街路樹として典型的な樹種が整然と植栽されている。また、本学の前身である県立短大の大学史から構内景観に関する記述を拾い上げ、現在見られる樹種相の成り立ち（歴史性）についての考察を試みた。

キーワード：種子植物、木本、生物多様性、生物学教育、環境教育、バラ園、千瓢亭（茶室）

1. はじめに

富山県は自然が豊かであり、山河のみならず身近な公園や花壇、街路樹といった市街地においても様々な緑にあふれている。しかしながら、社会経済の発展に伴う開発や地球温暖化により身近な自然環境は変化を余儀なくされ、これからも変化し続けていくだろう。そうした身近な自然環境の変化を感じ取ることは、この豊かな自然資源（生物多様性）を次世代に伝えるために、また、持続可能な社会を構築するために、現代社会に生きる我々にとって備えるべき重要な能力の一つと考えられる。そのためには我々一人一人が身近な自然をより深く理解していることが必要である。

本学学生にとって、大学構内で見られる自然は生物多様性を理解するための最も身近な教材である。しかしながら、身近な自然を理解したい（まずは生きものの名前を知りたい）と思っても、大学構内の植物や昆虫を見てその種名を自力で知るのは大抵の学生にはなかなかの困難であろう。また、図鑑類で調べるといった作業も慣れるまでは非常に労力を伴い、かえって図鑑嫌いになってしまう可能性がある。

そこで、本調査では本学における生物学教育および環境教育に資するための基礎資料として、本学構内に植栽または生育する樹種の分布図を作成することにした。また、現在（2018 年）、構内中央部にて新棟の建設が進んでおり、それらに伴い周辺環境の整備も行われるだろう（一部樹木

はすでに伐採済み）。結果的に、本資料の一部は近い将来、樹木マップとしては使えなくなるが、それは逆に、本学における自然景観の変遷を記録するという意味を持つことになる。加えて、本調査の結果は本学研究者が研究・教育において必要な植物試料を学内で探す際の資料にもなるだろう。

また、ある地域の生物相は（人為的であろうとなかろうと）その場所の（地史を含む）歴史を反映したものであり、大学構内のような小さな区画においても例外ではない。そこで、本研究では『富山県立大谷技術短期大学 10 年史』（富山県立大谷技術短期大学 10 年史編集委員会 1971）（以下、『短大史 1971』）、『富山県立技術短期大学史』（富山県立技術短期大学史編集委員会 1991）（以下、『短大史 1991』）、および『富山県立大学短期大学部史 50 年の歩み』（短大史編集委員会 2012）（以下、『短大史 2012』）の各文献から構内の樹木に関する記述を拾い出し、そこから現在の構内樹種相の歴史性に関して若干の考察を行った。

2. 調査方法

2017 年 10 月から 2018 年 9 月にかけて構内を巡回し、すべての成木個体（樹木および木本性つる植物）について種を同定し、地図上にその位置をプロットした。同時に、可能な限り花または実をつけた枝葉の一部を採取し、証拠標本として著者の研究室に保管し、種の同定のために利用した。

種の同定については次の図鑑類を参照した：「改訂新版日本の野生植物 1～5」（平凡社）, 「山溪ハンディ図鑑 3 樹に咲く花 離弁花 1」, 「同 4 樹に咲く花 離弁花 2」, 「同 5 樹に咲く花 合弁花・単子葉・裸子植物」, 「同 14 樹木の葉実物スキャンで見分ける 1100 種類」（以上は山と溪谷社）。サクラについては「サクラハンドブック」（文一総合出版）を参照した。園芸品種については可能な限り同定作業を行ったが、外部形態だけでは同定が難しく、不正確な場合もあるかもしれない。また、サクラの品種については花の時期に観察できなかった個体は品種の同定が困難なため、「サクラ」とだけ記した。木本性つる植物についてはよく目立つ個体については記録したが、幼個体は無視した。

分布図については大学構内を A から F の 6 区画に分け（図 1）, それぞれについて樹木分布図を作成した（図 2～図 4）。明らかに意図して植栽された個体についてはすべて位置をプロットしたが、敷地外または近傍の親木から種子が散布されて定着したと思われる幼個体の多く（ケヤキやアカメガシワなど）は無視した。様々な種の比較的小さな個体が密集した場所（特に区画 E および区画 F）では 1 本 1 本のプロットが困難なので、まとめて記録した。

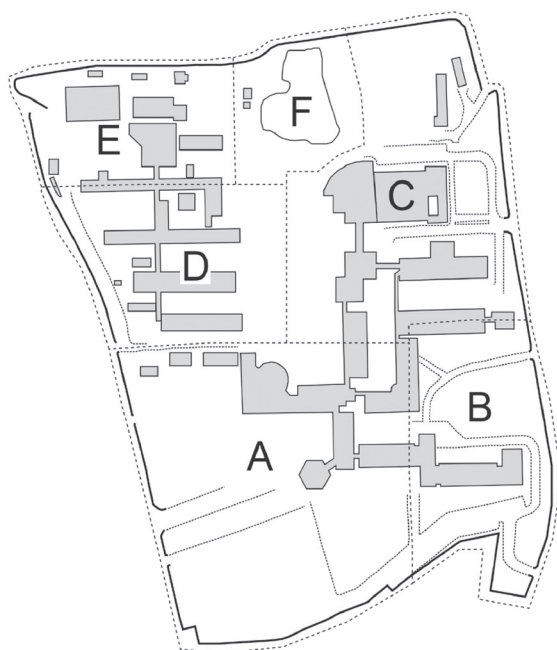


図 1 区画 A～区画 F の位置図（富山県立大学構内）

3. 結果

本調査の結果、裸子植物 4 科 10 属 11 種 13 分類群および被子植物 36 科 60 属 78 種 87 分類群の合わせて 40 科 70 属 89 種 100 分類群を確認した。ここで言う分類群とは種以下の変種および品種などをそれぞれ独立に数えた場合の単位である。各区画ごとの種数等を表 1 に示した。

表 1 各区画で見られた樹種数

区画	科	属	種	分類群
A	17	23	27	30
B	12	14	18	19
C	14	19	20	21
D	18	23	26	27
E	28	41	46	49
F	31	44	56	60

区画 A（南西部, 図 2）では、大学の正面ということもあり、イチヨウやケヤキ、ソメイヨシノ（図 5a）やヤエビニヒガンなどが整然と植栽されている。イチヨウは雌雄異株（雄株と雌株が別個体）であり、雌株にはギンナンになる。大駐車場の東側の芝生ではクロマツやシラカシ（構内で最も普通に見られる樹種, 図 5b）、イロハモミジ、ソメイヨシノなどがある。ケヤキ並木にはカナメモチ（図 5c）やサザンカ（図 5d）、ヤブツバキが混植されている。駐車場と芝生の間の生け垣もカナメモチ、サザンカ、ヤブツバキを中心に行っているが、所々に意図的に植えられたものか分からないが、キヅタやウバメガシが見られる。ここではヤブツバキと一括りにしたが、実際には様々な花色（赤、白、班入）・花形（一重、千重、獅子（図 5e））の園芸品種が混在している。サザンカと白花系のヤブツバキは 12 月頃から見られ、他の系統は 3 月、4 月ごろが開花ピークである。大駐車場の西側の境界にヒムロが植えられている。ヒムロはヒノキ科サワラの園芸品種で、（葉がウロコ状になる）ヒノキの仲間には見えないが、これは葉が針状に変化したものを選抜したためである（図 5f）。

区画 B（南東部, 図 2）では、南北の道路沿いにシラカシ、ソメイヨシノ、カンザン（八重咲きのサクラ）が並んでいる。研究棟南側の芝生エリアには、シラカシ、モチノキ、イロハモミジが、合同棟東側の芝生エリアには、メタセコイアやユリノキ、エンジュ、モミジバフウなどの立派な高木を見ることができる。また、この区画では 3 種のモクレン科（ユリノキ、タイサンボク（図 5g）、コブシ）が見られる（前 2 者は北米原産）。モクレン科は、花器官（花弁、雄ずい、雌ずい）がらせん状に配列している原始的な花の構造を持つ植物として植物学の世界では有名である。ただし、観察しようにも、たいてい手が届かないところで咲くのが難点である。タイサンボクは 6 月頃に大きな花を咲かせ、柑橘系の強い匂いを放つので、近くを歩いただけでもその存在がわかる。

区画 C (中央東側から北東部, 図 2) では南北の道路沿いにソメイヨシノ, シラカシ, ケヤキ, コナラなどが植栽されている。北側の小高い丘を超えたところにもソメイヨシノが並んでいるのが見られる。講義棟のすぐ西側にハナミズキが並んでいる。ハナミズキ (図 5h) は北米原産でアメリカヤマボウシとも呼ばれ, 日本に自生する近縁種ヤマボウシ (区画 E と F で見られる) と外見上よく似ている。ともに白い花卉のように見えるものは花卉でなく, 花序を包む総苞片で中央には小さい花が集まった花序がある。ハナミズキの花はお互いに離れていて, 果実期にはそれぞれが赤い小豆状の果実になり, それがたくさん集まった状態になる。一方, ヤマボウシの花はすべて合着しており, 果実期にはイチゴのように一つの果実のようになる。

区画 D (中央西側, 図 3) では, 南北の道路沿いにメタセコイアとサツキが並んでいる。落葉性針葉樹であるメタセコイア (アケボノスギとも言う) は, 絶滅した化石種として知られていたが, 後に中国で生育していることが確認され, 「生きた化石」とも呼ばれる。また, 化石種としてのメタセコイアを最初に発見したのは, 三木茂という日本人である (メタセコイアはかつて日本にも分布していた) (塚越 2016)。加えて, 構内ではこの区画でしか見られない樹種として, 本区画中央部にアオギリ (図 5i), 環境工学科棟の中庭にコウヤマキ, シャリンバイ, マテバシイ, トウカエデ, ナツツバキ, タラヨウが見られる。アオギリの果実は熟すと割れ, 舟形の心皮の縁に種子がくっついて (図 5i)。ナツツバキはその名の通り夏にツバキに似た白い花を咲かせ, 樹皮がまだら模様になる美しい樹種である (図 5j)。タラヨウは郵便局の木または葉書の木とも呼ばれ, 葉の裏に棒でなぞると文字が浮かび上がり, 「葉書」の起源とされる。同じ中庭にある園芸品種ヒラドツジは花つきがよく (図 5k), また, 花の萼にある腺体がよく発達し粘液を出して粘る。そのため, 小さい昆虫がよく囚われている。

区画 E (北西部, 図 3) は最も古くからある場所で, モミ, ヒマラヤスギ, メタセコイアはかなり大きな個体になっている。大谷講堂西側の林下には (あまり手入れがされないためか) 多種多様な樹木が密集している。それらが意図して植栽されたものなのか, 近くから種子が飛んで来て定着したものかはよくわからない。この区画でしか見られない種としてモミ, キャラボク, ミヤマビャクシン, ナワシログミ, ネムノキ, ゲッケイジュ, エゴノキなどがある。東側の茶室付近にはメタセコイアの大木があり, 歴史を感じさせる。また, 茶室の東側にあるナラガシワは樹高はそれほどでもないが, 枝の広がり具合 (樹冠の大きさ) は構内で一番大きいと思われる。大谷講堂の南側には枝や幹がねじれるように成長するカイヅカイブキが, 隣の計算機セ

ンターの建物東側沿いには地を這うように成長するミヤマビャクシンがある。ともに生物学的には同じ種 (イブキ) である。

区画 F (太閤池周辺, 図 4) は構内で最も樹種多様性が高い区域である (表 1)。太閤池の北西側に様々な樹種が混生したパッチがいくつもあり, 雑木林のようである。高木の樹種としてツブラジイとアカマツがある。その他の比較的大きいものとしてソメイヨシノ, エノキ, ヌルデ, アカメガシワ, ヤマハゼ, ヤマグワ (図 5l), サワラ (図 5f) などが見られる。ツタ, キヅタといったつる性木本も個体としては大きいものがある。様々な樹種の幼木が多数見られるが, 意図して植えられたものか自然に定着したものかの判別は難しい。ウメモドキ (図 5m) は趣のある花および果実をつけ, 生け花の花材としてよく知られているが, 雌雄異株で雌株と雄株の両方がないと結実しない。やや距離が離れているが, 幸い両株とも 1 個体ずつだがこの区画に見られるので結実が期待できる。池に沿って東側から南側にかけては, 大きく成長したクロマツやソメイヨシノ, カツラ, ケヤキ, コナラ, クヌギなどが見られる。池の北東から丘を登ったところに, 様々な樹種が混生している。大きな枯木やコブシ, ヤマグワがあり, それらに種々のつる性植物が絡みついている。アケビ (図 5n) は同じ個体に雄花と雌花をつける雌雄同株で, 良い香りがする。

4. 考察

4.1 大学構内の樹種相について

本調査の結果, 大学構内の北側の区画 (特に区画 D, E, F) には多種多様な樹種が見られ, 一見すると林のような状況になっており生物多様性が高いと言える。一方, 南側 (区画 A, B, C) はイチョウウやケヤキの並木, カナメモチの生け垣等が整備されており, 芝生上にはクロマツやイロハモミジ, シラカシ, ユリノキなどが植栽され, 公園・庭園のような景観になっている。この植生・景観に関する南北の違いは明らかに県立大学の歴史が関係しており, 県立大の前身である県立大谷技術短期大学開学 (1962 年 (昭和 37 年) 4 月) 当初から存続する区画 D, E, F では多種多様な樹種が見られ, その後, 徐々に整備された区画では庭園・公園的な景観を保っている。

筆者が調べた限りでは, これまで本学構内の樹種についてまとめたものは見当たらないが, 高等菌類 (キノコ) についての報告がある (橋屋ほか 2010)。それによると, 本調査結果と同様に, 南側エリアより北側エリアのほうがより多くの高等菌類 (キノコ) の発生が見られたと報告している。このことから構内の北側のほうがより生物多様性が高いと言える。

本学構内において最も普通に見られる樹種は常緑広葉

樹のシラカシである。6つの区画のどの区画でも見ることができ、本数としても多い。しかし、シラカシはそもそも富山県には自生しておらず、日本海側は福井県以西に自生するとされる。ただ、街路樹や公園樹としては富山県のみならず、東北地方以南では広く植栽されている。本学構内に見られるシラカシはドングリをたくさんつけ、地面には多くのドングリが落ちているのを見ることができる。富山県にシラカシが自生していない理由として、山下（2010）は多湿の雪の重み等により実生・幼木の主幹や枝が折れてしまうためと考察している。

国内的に見て貴重な樹種というものは見られないが、国内自生種で構内では1個体しか生育していない樹木として、モミヤコウヤマキ、タラヨウ、ナツツバキ、エゴノキなどが挙げられ、構内の樹種多様性という観点からは貴重と言えるだろう。特にコウヤマキ、タラヨウ、ナツツバキは環境工学科棟の人工池のある中庭にあり、残念ながら数年後には建物ごと取り壊される予定である。コウヤマキは日本固有種であり、世界的には珍しい樹種である。

4.2 大学構内樹種相の歴史性について

本学の前身である短大時代から存続し、長い歴史を持つ構内北部（区画D、E、F）で見られる構成樹種の歴史性を知るために、『短大史1971』、『短大史1991』および『短大史2012』の文献中に見られる構内の樹木に関する記述を拾い上げてみた。結論から言うと、構内に植えられた樹種の由来（いつ、誰が、どのような意図でこれらの樹種を植えたのか）についての記述はほとんどないが、いくつかのキーワードを軸に構内樹種相（の一部）の歴史性について考察してみたい。

富山県立大谷技術短期大学10年史（『短大史1971』）の本文中には構内樹種に関する記述は皆無だが、後半部分の追憶寄稿の中に興味深い記述を見つけた。同短大の初代学長である谷安正氏が寄稿した文章（「開学10年間の憶出」）中に、「6. バラ園由来」というサブタイトルが付いた文章がある。一部引用すると、

開学当時、短大のキャンパスは、甚だ殺風景であった。樹も無ければ花もない。…中略…。昭和38年度予算で植樹が認められ、その際構内にいささかの色彩を与えるために、同年の6月頃筆者がバラ100本寄附した。品種はクイーンエリザベス、イエローマスタピース、富士等の通俗であるが育ちやすく、しかも頑健な種類が主であった。門を入った左側の今乗用車の置き場になっているところとか、今の渡り廊下の脇、さらに玄関裏口等に植えられた。…中略…。さらに草友会からも寄附があり、…中略…。そして分散していたものを今のようにまとめ、バラ園らしい体裁を整えたのが昭和41年であったと思う。

バラの管理は主として渋川教授が当られ、草友会の学生諸君、木谷君等の助力も與ってこのバラ園は今年も美しく咲きほこることであろう(pp.142-143)。

渋川教授とは当時の農業機械科主任教授（渋川利雄氏）であり、また、木谷君とは当時の事務局職員として名が記されている木谷重吉氏のことかと思われる。草友会については、承認されたサークルの一つとして記録があるがそれ以上の記述は確認できない。

バラ園についての記述は富山県立技術短期大学史（『短大史1991』）にも見られる。こちら本文中ではなく、米沢茂美氏（応用数学科S46卒業生）の追憶文「想い出の学び舎」として挿入された文章中に見られた。曰く、

短大の構内には、いつも赤、黄、ピンクのバラの花が咲いていました。初代の谷学長がバラがお好きだったということですが、正面玄関の突き当たりにはバラのアーチがつくられていて、それは大きな見事な花を咲かせていました。そのバラの咲く中庭で野点をしたのも楽しい思い出となっています(p.136)。

また、同『短大史1991』には本田弘氏（元一般教養講師）による追憶文章もあり、その中にも渋川教授とバラの話が出てくる。

現在の大学構内に「バラ園」と呼べるような場所は見られない。しかし、これらのバラ園に関する記述を読んだとき、「そういうことだったのか」と合点がいった。それは、県立短大時代から存続する区画（D、E、F）ではあちらこちらにノイバラ（図5a）が茂っていることにやや違和感を覚えていたためである。ノイバラ自体は全国の野原や原野にやや普通に見られる種だが、一方で、園芸バラの台木として一般に使われている。園芸バラ自体の寿命は10～20年程度とされているが、台木として使われたノイバラはそのままにしておくと、さらなる成長または種子を残し繁茂するようだ。つまり、現在の大学構内で見られるノイバラはかつて谷学長や渋川教授ほかの方々が丹精に育てられたバラ園の名残りではないかと考えられる。

次に注目してみたいのは「千瓢亭」の存在である。この茶室の由来についても前出の谷初代学長の寄稿文に詳細が記されている（「5. 「千瓢亭」由来」）（『短大史1971』）。それによると富山の実業家、佐藤助九郎氏（三代助九郎で、助庵と号した）の寄付により開学翌年の1963年（昭和38年）8月に完成し、それ以来数多くの学生が茶道・華道の「けいこ」に勤しんだのは本学同窓会機関誌の表題が「千瓢」であることからもうかがえる。なお、この建物全体を「千瓢亭」といい、茶室そのものは「洗心庵」と呼ぶそうだ。『短大史2012』には建築直後の千瓢亭を正面から撮っ

た写真が掲載されている。それを見ると、建物の周りに高い木はなく、植樹されたばかりと思われる木々や竹が写っている（種名は分からない）。現在の千瓢亭のそばには立派に成長したスギ、メタセコイヤ、ウラジロガシがあるが、このとき（1963 年）またはそれ以降に植えられたものだろう。したがって、それらは樹齢 60 年前後と考えられる。また、谷初代学長の寄稿文には、佐藤氏の指導により茶室のみならず、その周りの庭の草木も佐藤氏自身が選ばれたことが記されている。しかし、どのような草木が選定されたのかは不明である。さらに、茶室の前には大きな柿の木があることが記されているが、現在、そのカキノキは見られない。だが、当時の草木がそのまま残っていないとしても、それらが種子をつけ、周囲に散布され、次（やその次）の世代が茶室近く（区画 E、F）に現在も生育している可能性は十分考えられる。

『短大史 1991』によると、昭和 46 年（1971 年）に開学十周年記念式典が行われ、その際、記念植樹が行われている。一部引用すると「場所は茶室前から池へのゆるやかな傾斜地で、ここに月桂樹が、そして、同時に中庭にはドイツトウヒ 10 数本が教職員の手により植えられた。」とある。現在、ゲッケイジュは「茶室前から池へのゆるやかな傾斜地」ではなく、大谷講堂の西側に 1 個体ある（根元から 2 本に分かれている）。これは当時の個体を後年に移植したものではないかと思われる（実際は分からないが）。また、ドイツトウヒが植えられた中庭がどこを指すのかわからないが、何れにせよ、現在、大学構内でドイツトウヒは 1 本も見られない。つまり、大谷講堂西側にヒマラヤスギの大木の影でひっそり生きているゲッケイジュだけが 47 年前の開学 10 周年記念植樹を今に伝える存在と言えるかもしれない。

県立短大開学以来 60 年近い歴史を持つ本学において、その発展の過程で構内の景観は変化してきた。その過程で姿を消した草木も数多くあるだろう。しかし、バラ園や千瓢亭、それに関わった人たち、加えて、開学当初からあった茶道部や華道部、草友会といった学生団体の存在は、本学初期の構内樹種相に多少なりとも影響を与えたと思われる。つまり、彼ら・彼女らの草木を愛でる精神が現在の大学構内（北側）の樹種相の基盤となっているのではないだろうか。そうした歴史的背景を知ることと身近な自然環境に興味を持ち、理解する上で重要なことと考えられる。

引用文献

- 橋屋誠・井口潔・鈴木敏彦・平野嘉孝・川崎正志・佐藤幸生. 2010. 富山県立大学構内の高等菌類調査. 富山県立大学紀要第 20 巻 25-33.
- 林将之. 山溪ハンディ図鑑 14 樹木の葉 実物スキャンで見分ける 1100 種類. 山と溪谷社, 東京.
- 茂木透・高橋秀男・勝山輝男. 山溪ハンディ図鑑 3 樹に咲く花 離弁花 1. 山と溪谷社, 東京.
- 茂木透・高橋秀男・勝山輝男. 山溪ハンディ図鑑 4 樹に咲く花 離弁花 2. 山と溪谷社, 東京.
- 茂木透・高橋秀男・勝山輝男. 山溪ハンディ図鑑 5 樹に咲く花 合弁花・単子葉・裸子植物. 山と溪谷社, 東京.
- 大原隆明. サクラハンドブック. 文一総合出版, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司 (編). 日本の野生植物 1 ソテツ科〜カヤツリグサ科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司 (編). 日本の野生植物 2 イネ科〜イラクサ科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司 (編). 日本の野生植物 3 バラ科〜センダン科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司 (編). 日本の野生植物 4 アオイ科〜キョウチクトウ科. 平凡社, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司 (編). 日本の野生植物 5 ヒルガオ科〜スイカズラ科. 平凡社, 東京.
- 短大史編集委員会. 2012. 富山県立大学短期大学部史 50 年の歩み. 県立大学短期大学部閉学・県立大学起源 50 周年記念事業記念式典実行委員会.
- 富山県立大谷技術短期大学 10 年史編集委員会. 1971. 富山県立大谷技術短期大学 10 年史. 富山県立大谷技術短期大学.
- 富山県立技術短期大学史編集委員会. 1991. 富山県立技術短期大学史. 富山県立大学.
- 塚越実. 2016. メタセコイアの発見と普及—三木茂博士の発見から 75 年—. 化石 100, 1-2.
- 山下寿之. 2010. シラカシが富山県で自生していない要因. 富山県中央植物園研究報告 No.15, 31-37.

富山県立大学構内の樹種目録

科名および種名（和名・学名）と順番は「改訂新版 日本の野生植物 1～5」に従い、外国産樹種などは必要に応じて前出の図鑑類を参照した。種名の後の「外」は外国産（日本に自生していない）、「園」は園芸品種であることを意味する。また、**A～F**はその種が見られた区画を示す（図1～図4）。

裸子植物 GYMNOSPERMS

イチョウ科 GINKGOACEAE

イチョウ *Ginkgo biloba* L., 外, **A**

マツ科 PINACEAE

モミ *Abies firma* Siebold et Zucc., **E**

ヒマラヤスギ *Cedrus deodara* Loud., 外, **A D E**

クロマツ *Pinus thunbergii* Parl., **A E F**

アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc., **E F**

コウヤマキ科 SCIADOPITYACEAE

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc., **D**

ヒノキ科 CUPRESSACEAE

サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl., **E F**

ヒムロ *Chamaecyparis pisifera* 'Squarrosa', 園, **A**

スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don, **E**

メタセコイヤ *Metasequoia glyptostroboides* Hu et W.C.Cheng, 外, **B D E**

ミヤマビャクシン *Juniperus chinensis* L. var. *sargentii* A. Henry, **E**

カイヅカイブキ *Juniperus chinensis* 'Kaizuka', 園, **D E F**

キャラボク *Taxus cuspidata* 'Nana', **E**

被子植物 ANGIOSPERMS

モクレン科 MAGNOLIACEAE

ユリノキ *Liriodendron tulipifera* L., 外, **B F**

コブシ *Magnolia kobus* DC, **B D E F**

タイサンボク *Magnolia grandiflora* L., 外, **B D**

クスノキ科 LAURACEAE

ゲッケイジュ *Laurus nobilis* L., 外, **E**

タブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc., **D E**

シロダモ *Neolitsea sericea* (Blume) Koidz., **F**

ヤシ科 ARECACEAE

シュロ *Trachycarpus fortunei* (Hook.) H. Wendl., **B C E F**

アケビ科 LARDIZABALACEAE

アケビ *Akebia quinata* (Houtt.) Decne., **F**

ツツラフジ科 MENISPERMACEAE

アオツツラフジ *Cocculus orbiculatus* (L.) DC., **F**

メギ科 BERBERIDACEAE

ナンテン *Nandina domestica* Thunb., **F**

フウ科 ALTINGIACEAE

モミジバフウ *Liquidambar styraciflua* L., 外, **B D**

カツラ科 CERCIDIPHYLLACEAE

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult., **F**

ユズリハ科 DAPHNIPHYLLACEAE

ユズリハ *Daphniphyllum macropodum* Miq., **E F**

ブドウ科 VITACEAE

ノブドウ *Ampelopsis glandulosa* (Wall.) Momiy. var. *heterophylla* (Thunb.) Momiy., **F**

ツタ *Parthenocissus tricuspidata* (Siebold et Zucc.) Planch., **E F**

マメ科 LEGUMINOSAE

ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz., **E**

クズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi, **C F**

エンジュ *Styphonolobium japonicum* (L.) Schott, 外, **B**

フジ *Wisteria floribunda* (Willd.) DC., **C D**

グミ科 ELAEAGNACEAE

トウグミ *Elaeagnus multiflora* Thunb. var. *hortensis* (Maxim.) Servett., **A D**

ナワシログミ *Elaeagnus pungens* Thunb., **E**

ニレ科 ULMACEAE

アキニレ *Ulmus parvifolia* Jacq., **C D F**

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino, **A C D E F**

アサ科 CANNABACEAE

エノキ *Celtis sinensis* Pers., **E F**

クワ科 MORACEAE

ヤマグワ *Morus australis* Poir., **F**

バラ科 ROSACEAE

ノイバラ *Rosa multiflora* Thunb., **C D E F**

ソメイヨシノ *Cerasus × yedoensis* (Matsum.) Masam. et Suzuki, 園, **A B C E F**

カンザン *Cerasus serrulata* 'Kanzan', 園, **B C F**

ヤエベニシダレ *Cerasus spachiana* 'Plena-Rosea', 園, **A F**

ヤエベニヒガン *Cerasus × subhirtella* 'Yaebeni-higan', 園, **A**

サクラ *Cerasus* sp., **E F**

カナメモチ *Photinia glabra* (Thunb.) Maxim., **A B**

シャリンバイ *Rhaphiolepis indica* (L.) Lindl. var. *umbellata* (Thunb.), **D**

ユキヤナギ *Spiraea thunbergii* Siebold ex Blume, F

ブナ科 FAGACEAE

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky, F

マテバシイ *Lithocarpus edulis* (Makino) Nakai, D

クヌギ *Quercus acutissima* Carruth., F

ウバメガシ *Quercus phillyreoides* A. Gray, A F

コナラ *Quercus serrata* Murray, C F

ナラガシワ *Quercus aliena* Blume, E F

ウラジロガシ *Quercus salicina* Blume, E F

シラカシ *Quercus myrsinifolia* Blume, A B C D E F

ニシキギ科 CELASTRACEAE

ツルウメモドキ *Celastrus orbiculatus* Thunb., A E F

トウダイグサ科 EUPHORBACEAE

アカメガシワ *Mallotus japonicus* (L. f.) Müll. Arg., A E F

オトギリソウ科 HYPERICACEAE

キンシバイ *Hypericum patulum* Thunb., 外, A

ウルシ科 ANACARDIACEAE

ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *chinensis* (Mill.) T. Yamaz.,
E F

ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* (L.) Kuntze, F

ヤマハゼ *Toxicodendron sylvestri* (Siebold et Zucc.)

Kuntze, E F

ムクロジ科 SAPINDACEAE

イロハモミジ *Acer palmatum* Thunb., A B F

フカギレオオモミジ *Acer amoenum* Carrière form.
palmatipartitum (Koidz.) K. Ogata, E

ノムラモミジ (オオモミジ *A. amoenum* の葉が濃紫色に
なった園芸品), 園, E

トウカエデ *Acer buergerianum* Miq., 外, C

ニガキ科 SIMAROUBACEAE

ニワウルシ (シンジュ) *Ailanthus altissima* (Mill.)

Swingle, 外, D E F

アオイ科 MALVACEAE

アオギリ *Firmiana simplex* (L.) W. F. Wight, D

ムクゲ *Hibiscus syriacus* L., A

ミズキ科 CORNACEAE

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl., F

ヤマボウシ *Cornus kousa* Buerger ex Hance, F

ハナミズキ *Cornus florida* L., 外, C

サカキ科 PENTAPHYLACACEAE

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb., E F

ツバキ科 THEACEAE

ヤブツバキ *Camellia japonica* L., A B D E

サザンカ *Camellia sasanqua* Thunb., A B C D

チャノキ *Camellia sinensis* (L.) Kuntze, 外, F

ナツツバキ *Stewartia pseudocamellia* Maxim., D

エゴノキ科 STYRACACEAE

エゴノキ *Styrax japonicus* Siebold et Zucc., E

ツツジ科 ERICACEAE

サツキ *Rhododendron indicum* (L.) Sweet, A C D E

クルメツツジ *Rhododendron 'Kurume'*, 園, A D

ヒラドツツジ *Rhododendron 'Hirado'*, 園, A D E

ドウダンツツジ *Enkianthus perulatus* (Miq.) C. K.
Schneid., A C E

アオキ科 GARRYACEAE

アオキ *Aucuba japonica* Thunb., E F

モクセイ科 OLEACEAE

ネズミモチ *Ligustrum japonicum* Thunb., A F

ヒイラギ *Osmanthus heterophyllus* (G. Don) P. S.
Green, F

キンモクセイ *Osmanthus fragrans* Lour. var. *aurantiacus*
Makino form. *aurantiacus* (Makino) P. D. Green, 外, A
B D E F

シソ科 LAMIACEAE

ムラサキシキブ *Callicarpa japonica* Thunb., E F

クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb., C F

モチノキ科 AQUIFOLIACEAE

イヌツゲ *Ilex crenata* Thunb., F

マメツゲ *Ilex crenata 'Convexa'*, 園, A B E F

ソヨゴ *Ilex pedunculosa* Miq., F

モチノキ *Ilex integra* Thunb., B C F

タラヨウ *Ilex latifolia* Thunb., D

ウメモドキ *Ilex serrata* Thunb., F

ウコギ科 ARALIACEAE

タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seem., C E

カクレミノ *Dendropanax trifidus* (Thunb.) H. Hara, B C
E F

ヤツデ *Fatsia japonica* (Thunb.) Decne. et Planch., A E F

キツタ *Hedera rhombea* (Miq.) Bean, A B E F

セイヨウキツタ *Hedera helix* (L.), C

ガマズミ科 VIBURNACEAE

サンゴジュ *Viburnum odoratissimum* Ker Gawl. var.
awabuki (K. Koch) Zabel, A E F

スイカズラ科 CAPRIFOLIACEAE

ハナゾノツクバネウツギ *Abelia x grandiflora* (Rovelli ex
André) Rehder, 園, C

スイカズラ *Lonicera japonica* Thunb., A C F

図3および図4

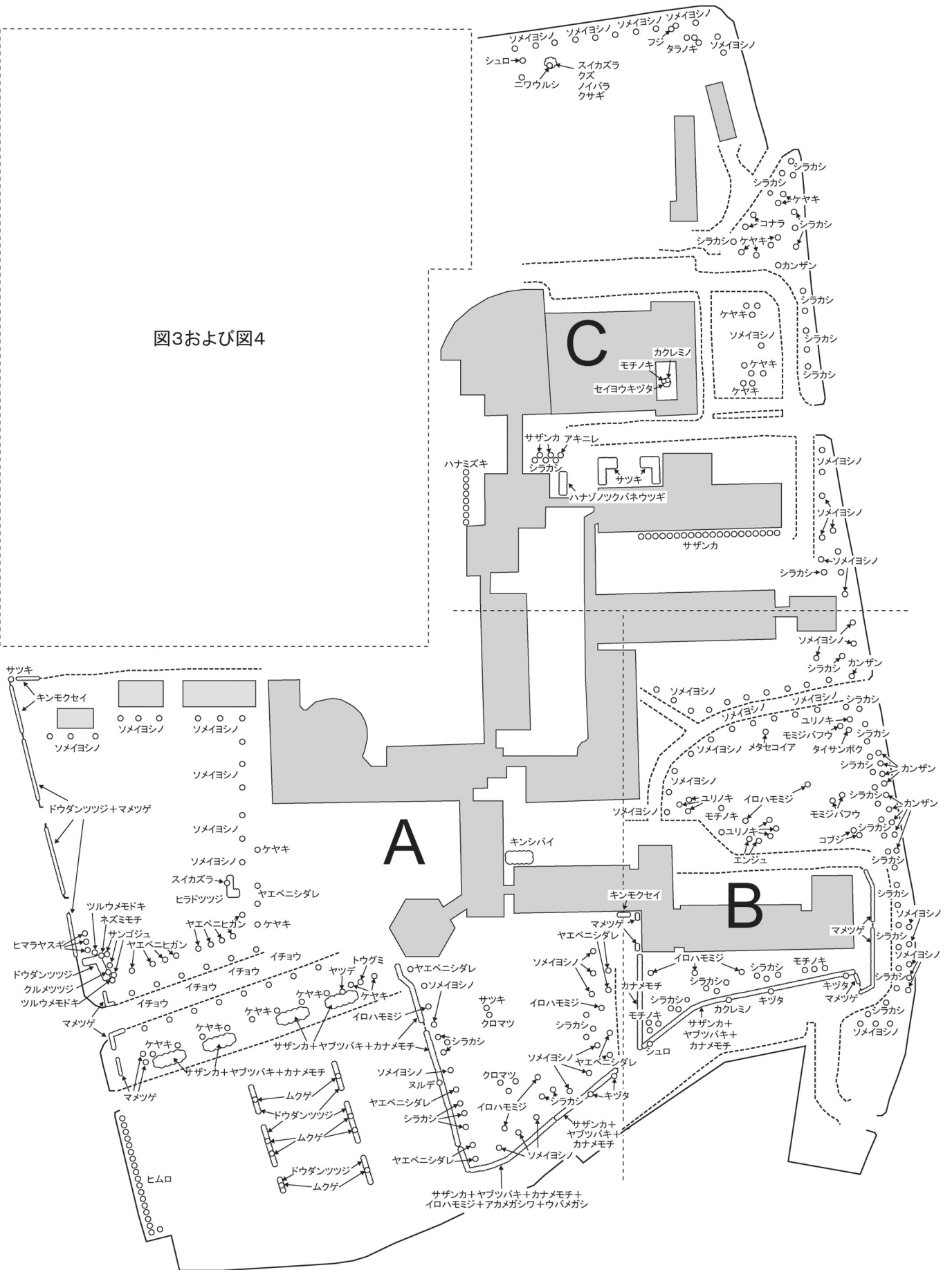


図2 区画 A, B, C で見られた樹木の分布図

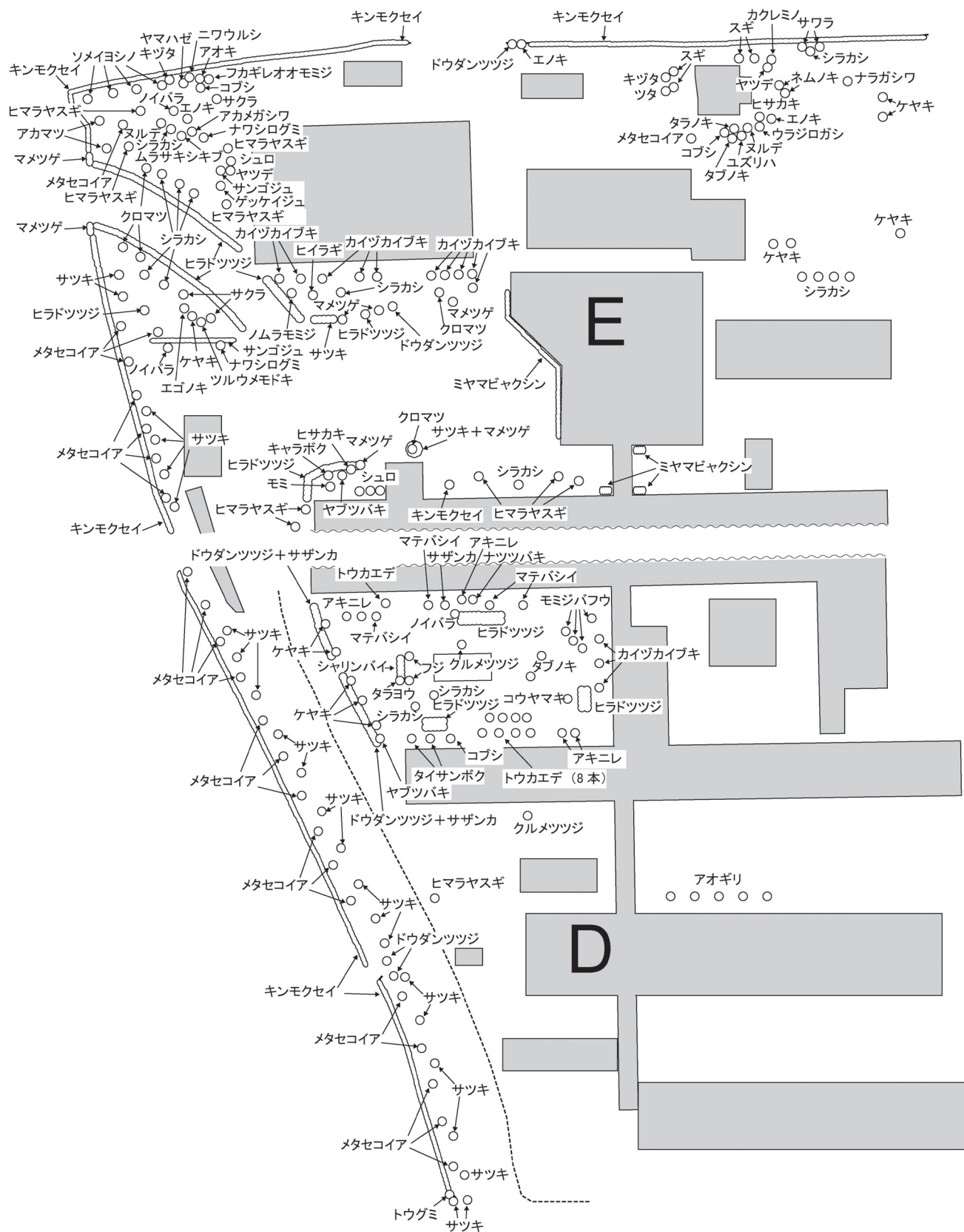


図3 区画D, Eで見られた樹木の分布図

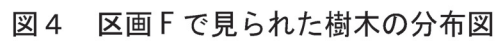




図5 大学構内で見られた樹種

a: ソメイヨシノ, b: シラカシ, c: カナメモチ, d: サザンカ, e: ヤブツバキ (獅子咲き),
 f: サワラ (左) とヒムロ (右), g: タイサンボク, h: ハナミズキ, i: アオギリ,
 j: ナツツバキの幹と花, k: ヒラドツツジ, l: ヤマグワ, m: ウメモドキ, n: アケビ, o: ノイバラ

Inventory and location maps of woody plants on campus of Toyama Prefectural University

Hiroshi SUZUKI

Department of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

Abstract: All living woody plants on the campus were identified and recorded on the maps. The inventory lists 40 families, 70 genera, 89 species, 100 taxa including forma and cultivar. The northern area with a pond where has a long history as a campus shows relatively high species richness and looks like a small mixed forest, whereas the southern area looks like a city park growing representative woody species known as garden trees.

Key Words: seed plants, biodiversity, biological education, environmental education